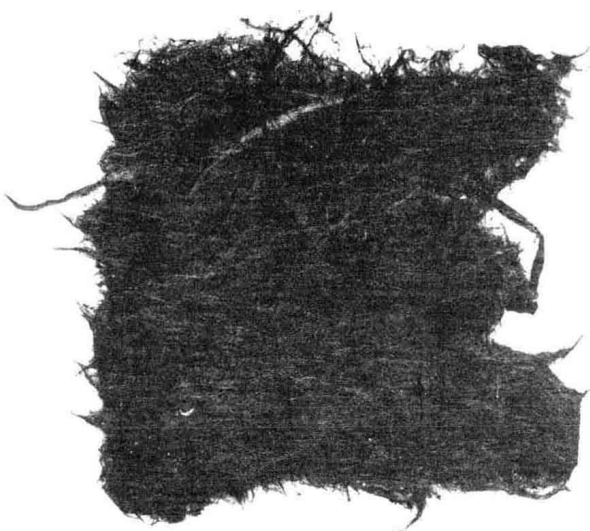
石の蝶

石の蝶

津村節子



石の蝶

昭和四十五年十月二十日印刷
昭和四十五年十月二十五日発行
著　者　津村節子
発行者　佐藤亮一
発行所　新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二
電話　東京〇三(260)一一一一(代)
振替　東京八〇八
印刷所　二光印刷株式会社
製本所　新宿加藤製本所
定　価　六五〇円
© Setsuko Tsumura. Printed in Japan 1970
落丁、乱丁本はお取換え致します。

石の蝶

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

百燭の電燈が金屏風に照り映えて、さよの姿を浮き上らせている。さよは、真新しい緋縮緬のゆもじ一枚をまとっただけで、軀を小刻みにふるわせながら立っていた。

産毛が金色に光り、うっすらと脂肪ののった皮膚は、体内から光を発しているように輝いて見える。古畳の上に敷いた毛氈とゆもじの色が、青白い彼女の皮膚にほのかに反映して、一層彼女をういういしく見せていた。周旋人たちは、商品価値を高めるためにさまざまな工夫を凝らすのである。

幼い児が泣きじゃくる時のように、さよは両手で顔を覆っていた。

肩もかぼそく、胸のふくらみもまだ充分の実りを見せていないさよの上半身に、男たちの眼が執拗に注がれている。顔は覆っていても、さよは皮膚の上を軟体動物が粘液を分泌しながら這い廻るような視線を感じて、肌が粟立ってくる。それらの視線は、露出している部分ばかりでなく、腰を覆っている布の内部にまで無遠慮にもぐり込んでくるような気がして、さよは膝をきつく合わせていた。

男たちは、何も言わない。が、室内には異様な熱気が籠っていた。

「年は十八ですがね、痩せているのは食いものが悪いせいでさあ」

食物さえ与えれば忽ち見事な開花を見せる筈だと、久作は保証もないのに確信ありげに言った。

男の一人が、さよの身につけている最後の一枚をとることを久作に要求した。久作は無造作にうなずくと、いきなりその骨張った手をさよの腰のものにかけた。

紐を用いず、ただ巻きつけただけの布は、軽くひいただけで簡単に久作の手の内にたぐり寄せられていた。さよは、その動作の素早さに呆然として、あらがう暇もなかった。

気づいたときには、何ひとつ覆い隠すもののなくなった裸身が、男たちの熱っぽい視線に晒されていた。さよは狼狽と羞恥にその場にうずくまると、手脚を固く軀にひきつけて胎児のように丸くなった。

久作は、荒々しくさよの肩を摑み、他の男たちがさよの手足を引き伸ばした。女の下半身の発育は、その値に大きな差違をつける。大金を投じる買手たちは、そこまで見極めねば納得しない。

男たちの手から漸く放たれたさよは、屏風の陰に走り込んで泣いた。男たちは泣いているさよをそのままにして、それぞれの値をつけはじめた。久作がそれを巧みに煽る。

身売りする女の数は、常に廓の需要に充たず、上玉と言われるような出物は滅多にない。大見世と呼ばれる妓楼には、出入りの専属周旋人がいて、楼主の希望にあうような女を、金にあかして探し廻っていた。無論男心をそそる容貌姿態を備えていることが第一条件だが、煩わしい係累のないこと、盗癖や歯ぎしり夜尿症など悪癖のないことの他に、格式を重んじる大見世では、品性も卑しからず、頭脳も平均以上、と贅沢な要求を並べている。

同じ身を堕すにしても、大見世に抱えられるのと、小見世の安女郎になるのとでは、その待遇

の相違は著しい。大見世専門の周旋人の目にとまるか、一般の周旋人たちの張り廻らしている網にかかるかは、その女の運、不運というほかはない。切羽詰って娘を売る親たちは、目先の金に釣られて、娘の売られる先の選択に心を用いる余裕などありはしなかった。

さよは、数人の男たちによって値踏みされ、競り上げられ、結局水月楼の手に落ちた。年季は四年で、前借金は千二百円。満州事変勃発から数えて三年目の昭和九年、さよが数え年十八の初秋のことである。

その年の九月、室戸颱風が関西一帯を襲い、死者二千五百人、負傷者八千余人、総額十億円という尽大な被害を与えた。新聞は連日その惨状を伝えたが、競い合うように東北地方の凶作を報道する記事が相継いで出た。日本の凶作は三十三年に一回あると言われており、丁度明治三十五年の大凶作から三十三年目に当っている。連年、水害や旱害、津波、雪害などで痛めつけられている東北地方の農村は、その傷手が癒えぬうちに、八月から九月にかけて例のないほどの冷気と多雨に見舞われ、決定的な打撃を蒙ったのであった。

唯一の現金収入を得る方法として、殆どの子供たちが年季奉公に出されたが、十四、五歳の少年少女たちは、三年あるいは五年の年季で二十円乃至三十円、娼妓に売られる娘たちのうち、東京、横浜、大阪、神戸といった大都市には、器量も比較的よく小学校卒業程度の学歴もある者が廻され、四年契約で千円どまりが普通だったが、地方の場末には、読み書きも出来ないような娘が、六、七百円で売られて行った。吉原は、遊廓として最高の場所柄とは言え、小見世の水月楼

が千二百円という値をつけたのは、破格なことと言える。

田舎の小料理屋やあいまい宿の女中を転々としているうちに借金がかさんで、周旋人の言葉たくみな勧誘にのり、女郎に身を堕す女たちに比べれば、親元からいきなり売られるさよのような娘は、すれていないという点では稀少価値があったが、全く未経験な娘がどれほど稼ぐようになるかは長年の勘を働かせるよりすべがなく、一種の賭でもあったのである。

一

さよの生家は、荒川放水路の土手の下のバタ屋部落に隣接していた。土地の人々はこのあたり一帯を土手下と呼んでおり、人種でも異なるような眼でかれらを見ていた。

前方に巨大なコンクリートの堤防が横たわり、その堤防の際に近くなるに従って町の地盤は低くなっていたから、土手下の家は陽が当らぬばかりか、一週間も雨が降り続くと、床の上まで水に浸る。どの家の羽目板にも、船の吃水線のような浸水の跡がしるされていた。

部落の住人たちの生活はさまざまで、バタ屋のような組織はない。家の造りは住人たちによって多少異なるが、似たりよったりのバラックで、牛小屋のように床に藁を敷き、蒲団もない家が少なくない。

住人は、千住の廓の牛太郎、香具師、チンドン屋、遊芸人などが上層階級で、あんま、よいとまけ人夫、押しかけ乞食の念仏行者、街頭乞食、その他得体の知れない者たちが吹き溜りのように寄り集まっていた。土手の上を通ると、土手下から一種異様な臭気が立ちのぼってくると嫌悪されているが、住人たちは軀にも衣服にもしみついた臭気に麻痺して、全く無感覚になっていた。

こうした人々は、土手下ばかりでなく、東京市中のあちこちの貧民街に、川の淀みに漂う芥の

ように集まっていた。大正十年に東京市社会局の調査で二千八百六十九人と発表された市内に定住している細民が、昭和五年には八万三千人にふくれ上り、市外の定居細民とあわせるとおよそ二十八万人という膨大な数にのぼった。

浅草公園には、活動や見世物の終った頃あいを見はからって、ルンペンたちが残飯を貰いに歩く姿が見られた。ルンペンたちにはそれぞれズケ場と称する縄張りがあり、仁王門の庇下(ひさしした)には、ズケ場をもたないルンペンや、ズケに関係のない現金専門のケンタとよばれている乞食や、ルンペンに落ちてまだ日の浅い新グレ等が、菰(こも)にくるまってうずくまっているのも珍しくない光景であった。

大正末期から昭和の初期にかけて、重苦しい暗い時代が続いていた。

第一次世界大戦後、急激な膨脹をもたらした大戦景気の反動として発生した金融恐慌は、関東大震災の打撃によって一層深刻化した。ストライキが激しくなり、労働組合と組合員の数も増加して、左翼労働組合の全国組織である日本労働組合評議会が結成され、同様に農民運動も活発になった。政府はこうした情勢に対処するため、大正十四年三月に治安維持法を成立させ、弾圧を強化したが、社会の混乱は一層著しくなっていった。

昭和と年号が改まっても不景気はおさまるどころか、昭和二年には多くの中小銀行が倒産し、銀行の取付け騒ぎが新聞紙上に大きく報道され、殺気立った預金者たちが預金引出しを求めて列をなし、銀行の周囲を取り囲んだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

翌三年には、三・一五事件が起り、共産党が大弾圧を受けたが、日本政府は同時に張作霖を殺して、満州進出をはかった。昭和四年に起ったニューヨーク恐慌は、日本にも少なからぬ影響を及ぼし、東北地方では凶作がつづき、都会には失業者が溢れ、農村では人身売買が頻発した。

昭和六年に満州事変が勃発。王道楽土のかけ声と共に満州国建国が進められ、満州ブームが不景気を緩和するかに見えたが、この頃あたりから軍部内の統制が乱れはじめ、国家改造の風潮が不穏な空気を醸し出していた。何もわからぬ庶民たちは、不景気に痛めつけられ、頭上に覆いかぶさっている暗雲のような不吉な気配を何となく感じとっていて、都会には退廃的な空気が色濃くなってきていた。

不景気の皺寄せは当然のことながら下層階級ほどひどく蒙り、工場閉鎖や、給料遅配、その他労働条件は苛酷になる一方であった。

さよの父留蔵も、はじめは紡績工場に勤めていたが、ストライキに巻き込まれ、昭和六年に四十九歳で馘になった。

その後、職を転々と変えたが、鉄道工事の土工として出稼ぎに行っている時、過重な労働と不摂生な生活で健康を損ねて帰って来た。それ以来、世の中が悪い、政治が悪いというのが口癖で、朝から酒浸りの生活である。たまに気が向くと、立ちん棒に出かけて行った。坂の登り口にいて、荷をつけた大八車の後を押し、二銭、三銭と押し賃を貰うのである。交通量の多い急な坂には、立ちん棒が何人も立った。しかし、留蔵のように気まぐれな働きぶりでは、生活の足しになるど

ころか、かれの酒代にもならない。

さよは小学生の頃から子守をさせられていたが、卒業と同時に呉服屋に女中奉公に出された。さよより四歳年下の弟の順吉も、卒業を待っていたようにすぐ米屋に奉公に出されたが、半年も経たぬうちに喀血して家に戻された。父はすでに失職しており、その上病人を抱え込んで到底母の内職だけでは生活が成り立たなくなった。順吉の下には、まだ敬吉という男の子と、知能の遅れた芳枝がいる。

母は、さよを奉公先から呼び返し、度重なる流産のために血色の悪い顔に紅白粉をつけ、千住の小料理屋へ通うようになった。

肺病やみのいる家の中で辛気臭い手内職をするよりも、母は外へ出て働くほうが気が晴れるらしく、頭痛も以前ほど訴えなくなった。化粧のせいもあるのだろうが、顔色もいくらかよくなったようである。だがさよは、母が小皺の目立つ顔に厚化粧して男の酒の相手をする店へ出かけて行くことに、虚心ではいられなかった。

さよは、母の働きに出ている一家をあずかり、貧しい家計のきりもりと、病気の弟の世話をするようになったが、末の妹の芳枝は学齢に達してもまだ寝小便をし、知恵の遅れが甚だしいために学業にもついてゆけず、飲んだくれの父と、結核の弟と共にさよの負担になっていた。

夏になると、土手下の家々は風が通らず、その上湿地帯のため凄まじい蚊が発生する。一年中で一番堪え難い季節だった。夕方になると、各家が生草を焼いて蚊いぶしをするが、その煙にいぶされて、人々は激しく咳き込み、涙を流した。

トタン屋根に照りつける太陽は、狭い家の中を坩堝のようにし、夜更けてもその熱はさめない。健康な者でも衰弱するのだから、順吉は到底この夏は越せまい、とさよは暗澹とした思いに胸をふさがれる。

順吉は肋骨が一本一本数えられる薄い胸を喘がせて、裸で横たわっていた。目ばかり大きくなり、鼻が尖ってきて子供らしさは殆ど失せてしまっている。ものを言う声もか細くて、傍へ行ってやらねば聞きとれない。

ラムネが飲みたいと言うので、さよはそれよりも少しでも滋養になるものをと思ったが、食欲の失せた順吉はひび割れた唇を動かして、しきりとラムネをせがむ。

氷を入れたバケツに浸けてあるラムネを一本買い、冷たいうちに与えたいと小走りに帰って来ると、家の近くで父に出遭った。

父はまだ陽も落ちぬうちから足許も危ういほど酔っていて、いきなりさよの手からラムネを奪い、取り戻そうとするさよを突きのけると、喉を鳴らして一気に飲み干してしまった。たった一本のラムネを買うために、乏しい食費を削らなければならないのである。暑さに口を粘らせ、胸を喘がせている順吉のことを思うと、さよは父を憎悪せずにはいられなかった。

順吉が発病したのも、もとはと言えば父のせいだ、とさよは思う。メーデーに芝公園に一万五千人もの労働者が集まり、紡績女工が演壇に立って待遇改善を叫んだ、という話も聞いたが、妻子を抱えた分別盛りの男がストライキなどに加わるから、結果は家族をどん底に突き落してしまった。父はただ考えもなく巻き込まれただけで、敗れたあとはやけになり、酒浸りになって、社

会が悪いの、政治が悪いのと聞き齧りの言葉を操っているだけだ、とさよは腹立たしくてならない。

順吉は、家にいるときから顔色が悪く、なんとなく大儀そうにしていたが、誰も気をつけてやる者はいなかった。その頃から微熱があったのか、男の子のくせに、夕方になると色白の頬をほっと染めていたことを思い出す。かれは、自分の軀が大儀なことを訴えようともせず、小学校を卒業すると早々に奉公に出、幼いながらも家の助けをする気だったのである。

だが順吉が帰って来ると、父はかれの病気を怖れてかれに冷たかった。最近働いたこともない父が、どこからか古材を集めて来て家の軒下にトタンをさしかけ、その囲りをかこって漸く一人が寝られるだけの病室を作った。

雨はもり、薄い板の隙間から西陽が射し込む棺桶のように細長い部屋でも、順吉は生れてはじめて与えられた個室を喜んでいた。自分の病気が伝染性で、家族たちに怖れられていることを知っているかれは、咳をするのも遠慮しながらひっそりと呼吸していた。

酔いどれの父にラムネを奪われても黙って堪えている順吉に対して、父は憐憫の気持もないようだった。

「おい、そこを閉めとけ」

と、まるで穢れものを見るかのように、順吉の病室との境の窓を顎でしゃくったりする。もともと窓の外の軒下へ古材を集めて接ぎ足した部屋なのだから、窓を閉めてしまえば病室は屋外に孤立してしまう。それで父は、感染から逃れられると安堵するのかもしれないが、自分の病気を

ひけめに思って咳をするのもこらえている順吉がどんな気持になるか、思い遣ろうともしない。
「そこを閉めちゃ、風が通らなくて順が――」
「順が、順が、とおまえはふた言目には順だ。順の病気がうち中にうつったらどういうことになる」
「うつるのが怖かったら、入院させてやればいいのに」
温和(おとな)しいと思っていたさよの思いがけない抗議に、
「そんな金がどこにある」
と留蔵は眼を光らせた。
「とうちゃんがお酒さえ飲まなければ」
「焼酎をやめて、順を入院させられると思うのか」
「飲むのをやめて、働いてくれれば」
茶碗がいきなりさよの額に飛んで来た。焼酎がさよの顔にかかり、茶碗が土間に転がり落ちて割れた。
「だれのおかげで、おまえはこの世に生れて来たというんだ」
父の言うことは矛盾している。産んでくれと頼んだわけではない。おれが酒浸りになるのは世の中が悪いからだ、と父自身が言っているではないか。そんな悪い世の中に産んで貰っては迷惑というものだ――。
さよは、喉まで出かかった言葉を、口に出すまい、と歯を食いしばった。

順吉が、藁の上から痩せた腕を伸ばしてガラス戸を閉めた。窓もない畳一畳分ほどの順吉の部屋は、本当に棺桶のようになった。まだ見たことはないが、上等の棺桶というものは遺骸の顔の部分がガラス張りになっているという。窓ガラスの向うに仰臥している順吉は、生きているようには見えなかった。

父は、いずれ間もなく死ぬ順吉のために金を使うのを惜しんでいるに違いない。いっそ早く死んでくれればいい、と内心思っているかも知れなかった。

だが、順吉にしても、こんな家に生れて来たかったわけではあるまい。生れてまる十三年のあいだ、美味しいものを腹一ぱい食べさせて貰ったこともなく、楽しい思いを一度も味わったこともない。弁当も持たず、教科書もなく、夏は炎天下帽子もかぶらず、冬は雪の中を足袋もはかず、貧しさ故に友達からさげすまれ、いじめられ通しで漸く肩身の狭い小学校生活を終ると、品物のように前借金で奉公に出された。病気で大儀な軀をひきずって働き続け、喀血すれば疫病神のように追い出され、家に帰れば棺桶のような部屋に入れられ、一番近い肉親から死を待たれている。さよは、自分より不運な順吉がしみじみ憐れであった。

父に、おまえはふた言目には順が、順が、と言うと言われるが、さよにとって一番心が通い合うのはやはり順吉であることはいなめない。もとより、父に対しては一片の愛情も持てなかったし、十一にもなって家庭の事情を一向に理解しようとしない自己本位の次男敬吉や、頭の鈍い芳枝には、憐憫以外の感情は湧かないのであった。そして、母に対しても、さよはなぜか順吉に対するような愛情が抱けなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com